

オスマン帝国の 伝統漂う街並み

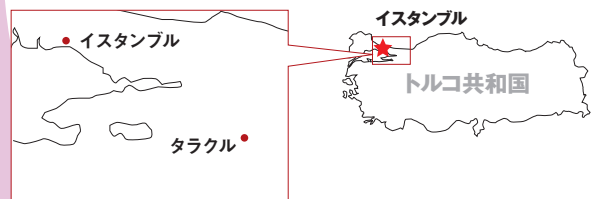
山あいの小さな町に点在するモスクは、歴史に彩られた文化を想起させる。
現代社会に染まらない町の中で現代を生きる人々の暮らしが脈々と営まれているタラクル。
さあ、タイムトリップに出かけよう。



1 2



3 4



チッタスロー (cittaslow)
「スローシティ」の意。地域独自の生活・歴史文化や自然環境など多様性を重視した町づくり活動。

- 1 標高100mのカラギョル高原
- 2 手作りのスプーンはお土産に適している
- 3 白い外装と赤い屋根が特徴の伝統的家屋が連なる
- 4 数あるモスクのなかでもユヌス・パシャ・モスクが有名
- 5 散策するのが楽しいバザール

マルマラ地方南東部に位置するサカリヤ県タラクル (Taraklı)。イスタンブルまで約200km、アンカラまで約270kmの距離にあり、山々に囲まれた人口約6800人 (2017年現在) の小さな町だ。長い歴史を有し、ビザンツ帝国時代は小さな城塞都市として、オスマン朝時代は街道沿いの宿場町としてにぎわいをみせていたという。

現在のタラクルは、周囲を雄大な山と緑に囲まれ、高台に城塞が残る静かなる文化的観光地。2011年、各地域に根ざした文化や暮らしを守るイタリア発祥の町づくり運動、チッタスローに指定されたことで、のどかで静かな町に多くの観光客が訪れるようになった。

オスマン帝国の面影を感じさせるのは、町中に点在するモスクの存在だ。16世紀を代表する建築家ミマル・スィナンにより1517年に建設されたユヌス・パシャ・モスクは、その象徴。地元の人々にはクルシュンル・モスク (Kuşunlu) と呼ばれ、タラクルのランドマーク的存在になっている。

土台が正方形のモスク外観は、鉛で覆われたドームと単一のミナレット (尖塔) が印象的だ。1999年の地震でも亀裂が入ることはなかった強固な造りも特徴といえる。注目すべきは16世紀初頭に地下暖房のシステムが取り入れられていたことだ。隣接するトルコ式浴場の蒸気を利用し、モスクの床を暖めていたという。ビザンツ帝国時代、豊富なミネラルを含む粘土浴は、病気の治療に用いられたといわれている。

町の中心部には東西にアンカラ通りが貫いており、南側にバザール、北側に市役所や土曜に開催される露店市がある。土曜市は大きな屋根のかかったエリアと屋外エリアがあり、毎週近隣の村から運ばれる新鮮な野菜や食料品、衣類、日用品、農具などが並ぶ。対するバザールは常設の商業エリアで、こちらにも野菜や乾物、日用雑貨といった生活必需品が並ぶほか、主に女性たちが製作する工芸品もあり、散策するのが楽しい。

地元女性が手づくりしているのは、木製のくしやすプーンで、17世紀以来受け継がれてきたもの。タラクルという町名も、トルコ語で「くし」という意味がある。また、バザールでお土産を買うなら、タラクルの特徴的な家屋のミニチュアや地元の松を使ったジャムがお勧め。町の中心部にあるレストランでは、アナトリア料理を楽しむこともでき、小麦と水だけで作る素朴なデザート「ウーウット・タトゥルス (Uğut Tatlısı)」がイチ押しだとか。

トルコ伝統の木造家屋を修復

タラクルの魅力として、白い外装と赤い屋根が特徴の伝統的家屋も挙げられる。背景に豊かな緑、足元に石畳の小道があり、どこを切り取っても歴史を感じさせる絵になる風景。家屋の建築様式はオスマン帝国時代の様式を踏襲しており、政府により保護地域に指定されている。

タラクルでは伝統的な街並みで世界遺産に登録されたサフランボルに学び、

伝統的な木造家屋の修復・保存に力を入れている。特に3階建ての家は3世紀以上の歴史があるため、費用をかけて改装工事を実施。前述のバザールでも木造の店舗は修復中で、64の木造店舗のうち55店舗を修繕し、市役所に近い木工アトリエでは伝統的な家具の修復作業も行われている。

旅行者が実際に伝統的な家屋を訪れるなら、2軒がホステルとして活用されているので宿泊も可能だ。また、旧邸宅の一つを復元したキュルトゥル・エヴィは民俗学博物館として生まれ変わっており、気軽に訪れることができる。

また、時間が許すなら、タラクルから車で約1時間弱でアクセスできるカラギョル高原へ行ってみたいのもいいだろう。少し足を延ばすだけで、雄大な自然を有する絶景スポットに出会える。標高100mの高原は、ウォーキングやハイキングなどの自然散策だけでも魅力的だ。アクティブ派ならキャラバンキャンプやパラグライダーを楽しむこともできるため、ファミリーで訪れるのに最適なエリアとなっている。

Taraklı

365 mの石橋が世界遺産のリストに

サカリヤ県セルディヴァン区にあるユスティニアヌス橋がこのほど、ユネスコの世界遺産暫定リストに登録された。サカリヤ橋としても知られるこの橋は同県が誇る歴史遺産の一つで、橋のあるセルディヴァン区では長期にわたって世界遺産登録への取り組みを行ってきたという。

ユスティニアヌス橋はビザンツ帝国時代初期のアナトリア地方における最も壮大な記念碑的建造物の一つ。その歴史は約1500年にも上る。527年から565年にかけてユスティニアヌス1世が首都であるコンスタンティノープル (現在のイスタンブル) と東の地方を結ぶ交通や通信網を改善するために建設を命じたもの。

かつては橋の下にサカリヤ川が流れていた。特徴は9.85mの幅もさることながら、365mというとても長い長さ。中央にある約23mのアーチも独特なデザインとなっている。

